

ロシアから帰って（94・5・16）

枝 村 純 郎（昭24・文甲1修）

ただ今、安部先輩から御紹介を頂戴致しました枝村でございます。安部先輩からは、「前回の十八日会の総会で満場一致で講演料はタダということになったから喜べ。」と言われまして、大変嬉しく今日は参上致しました。

私は外務省に入ってもアメリカとか東南アジアとかそれからまあ多少中南米の関係とかはやったことあるけれども、ロシア、ソ連というのはやったことが無かったです。ところがやはり三高の村田良平が次官で、私がインドネシアにいる時、大使会議か何かで東京に帰ってきたら、「君ね、この次はモスクワ行ってくれ。」と、こう言われました。私は大分迷いました。しかし、全く未経験の分野の新しい事を最後にやってみるのも一つの人生かなと思って暫くして受けると言うことを答えました。

ただ受ける時の条件として、私はロシア語はもちろん出来ないし、ソ連の専門家じゃないから

インドネシアからソ連に行く前に数カ月余裕が欲しいと申しました。それでインドネシアから帰って数ヶ月間、色々話を聞きました。しかしどうももう一つ納得出来ないものがあつた。当時ゴルバチョフの下で、既にペレストロイカが始まっていました。ペレストロイカの外交面での表われは、新思考外交です。労働者階級の利益よりも人類共通の利益を優先するのだという事が謳い文句になっていた。しかし一方では日本側には抜き難い不信感というものがソ連に対してはありました。だから、ソ連についての話というと六分四分で、ペレストロイカを歓迎するという話が四分で、抜き難い不信感が六分位にどうしてもなる。私は一体何処に自分のスタンスを取るべきかと、悩んだわけです。ところが、一九九〇年の四月二十五日が駐ソ大使発令の日でした。その日に、大使室という大使の溜り場に行つて自分のデスクを見たら『フォーリン・アフェアーズ』というアメリカの外交雑誌があつたのです。今では、中央公論に翻訳が毎月少しずつ出てますけれども、一九九〇年の春季号、それが来ていたのです。

その春季号を開けてみたら巻末の方に、ジョージ・ケナンの論文が出てたんです。ジョージ・ケナンは御存知の様に「封じ込め政策」の提唱者として有名な人です。しかし、その論文は彼がこの一九九〇年春季号のために新たに書いたものではなく、一九五一年、実に四十年前に寄稿した論文でした。一九五一年の春季号に掲載されたものですが、それがあまりにも現在の状況に適合しているというので、編集部も裁量でもう一度再録したと、こういう事なのです。その論文は

英語で十ページか十二ページ位の短い論文ですから私もさつと読んでみまして、大変感銘を受けました。彼が一九五一年に言っているのは、このソ連の社会主義体制、こういう人間性に反する不自然な社会は必ず崩壊するということです。自然に壊れるからコンテインメント（封じ込め）が効くわけです。ほっときや自然に崩壊するのですから、向こうが出て来れば止めなければいけないけれども、出て来ない限りにおいてはほっとけばいいと。ほっとけば自然に崩壊するという信念に基いて彼は書いてあるわけです。一九五一年、朝鮮戦争の酣の時にですよ、その事が偉い。これはちゃんと見透していた。内部から壊れるということを見抜いていたのです。それからもうひとつ何が偉いかと言うと、そのソ連が壊れた時にどう対応すべきかということも四十年前に、ちゃんと論じているのです。それは、ソ連体制の下に隠されていた地金が出てくるというのです。出てくるのはロシアの地金です。だが、そのロシアの地金を期待すべきかというのと、たいした期待は出来ないのです。ロシアには民主主義の伝統もなきや、市場経済の伝統もない。

そのようなロシアの地金が出るとして、だからどうするかと言えば、やはり温かく、辛抱強く見守ってやらないといけないのです。ロシアのことを民主主義とか、市場経済とかアメリカのスタンダードをそのまま用いて判断してはだめであると、こういう話なんです。温かく辛抱強く、忍耐強く待ってやろうじゃないか。これですよ。私も、成程これでいけるのじゃないかと思いま

した。私は戦略論とか条約論とか余り難しい理論は得意じゃないのです。私はむしろ、人間と人間の関係ということの方に外交の重点を置いてやって来た。少なくとも外交の現場ではその方がいいという気持ちを持ってやって来たものですから。ケナン流で行ってやろうと決心してモスクワに行きました。

大分待たされた上で、九〇年七月の末にゴルバチョフ大統領に信任状を捧呈しました。型通りの捧呈式をしたのですが、捧呈式のあとゴルバチョフが、一分間の会談に臨もうと私を誘いました。実際には一分ではなくて十五分か二十分になったのですけれども。そのとき私が言ったのは、私はインドネシアでの在勤の終わりに、枝村の外交スタイルはオープン・アンド・ダイレクトだということとで一定の評価を受けて、新聞の社説などでもそういう風に書いてくれた。ソ連に来てもそれでやりたいと思うけどもどうかとだろうかと言ったのです。そうするとゴルバチョフさんも全くそれは賛成だと。自分もそういう事で、まずは卒直にものを言う。そういう事で西側の指導者ともやってきた。ところが、西側の連中は、まさかソ連の指導者がそういう率直なスタイルでくると思わないから、最初はびっくりして上手くいかなかったけれども、だんだんやってみると、それが一番だということになって来た。だから君がそういう事でやるなら俺も賛成である、こういう事を言ってくれた。

このように最初から私はゴルバチョフとは割りにうまく行きました。ちょっと難しい局面でも

意思疎通は、うまくやれたように思います。あの人はなかなか魅力のある人です。ちょっと話している間にも、ひよっと言葉をとめて、こう流し目で人の顔を見て、「ねえ、そうだろう」というような顔をする時はなかなか魅力がある。それが、ゴルバチョフの統治スタイルにも影響していたと思います。つまり彼は直接に話の出来る人、話の出来る範囲においては絶対に強いのです。だから、国家機関であれば最高会議であるとか人民代議員大会であるとかにおいて、ゴルバチョフ弾劾というようなことで、最初には氣勢が上がっても、彼が立って一場の演説をやるのと治まってしまうのです。あるいは、ソ連共産党の党大会、就中、中央執行機関である政治局だとか中央執行委員会なんかで反乱の兆し有りなんて新聞では言っていますが、結局は彼の言う通りに治まってしまうのです。それには彼の個人的な魅力、説得力、そういうものが、あずかって力があつたと思います。逆に彼の場合は、中央権力機構を通ずる統治にあまりにも自信を持っていた為に、民衆の気持ちを吸い上げられなかった。それが結局彼の没落に繋がったというのが、簡単に言ってしまうえば、私の考え方です。

私はゴルバチョフの補佐官で、彼の一番信頼しているチェルニアエフという人と親しかった。この人はゴルバチョフより十歳年上ですから今はもう七十三、四です。その男と非常に親しかったので大変幸せでしたのでありますけれども、大使を辞めて東京に帰るといふ時に彼に会いに行つて、「君、ゴルバチョフの時代に間違いがあつたとすれば何だつただらうか」と、こう聞いた

んです。そして彼は、ニヤーっと笑って、「ムノーガ（沢山）」と申しました。間違いは沢山あった。しかし、強いて二つ上げれば、第一は彼が最後まで共産党を捨て切れなかったこと。共産党がやがて改革の党になり、ペレストロイカを推進する母体になるだろうという気持ちを持って切れなかったこと。それが第一の間違い。第二の間違いは、民族主義の滔々たる流れを理解出来なかったこと。その事だったと思うと。この二つを挙げました。やつとそうやってゴルバチョフや、その側近に食い込んだと思ったら、ソ連が引っ繰り返ってしまいました。一九九一年の二月のことです。

それまでも、謂わばゴルバチョフ、エリツイン並立時代というのがありましたから並行してはやってましたけれど、エリツインの方に重点を移して行かないといけなくなりました。エリツイン大統領以下のロシア政府とどうやって関係を築いていくか。ところが、エリツインという人については、ゴルビーと違ってエリツイン人気というのは日本ではあまり出て来ない。確かに、一度決めた訪日を急にキャンセルするなど不愉快な事もありましたけれども、エリツインさんはなかなか愛すべきところもある、それなりに偉大な人物です。エリツインのやり方が、先程述べたゴルバチョフの統治スタイルと基本的に違うところは、常に民衆を直接に相手にする。民衆の支持を基盤にして物事をやるというのが彼の行き方なのです。しかし、民衆の支持という点と、じゃあどうしてあんなに威張っているのだろうかという事になるのだけれども、私は、ある時にエリツイ

ンがドゴールを非常に尊敬しているという話を聞きました。それならと思って『メモアール・ド・エスポワール』、文内の方がおられたら発音が悪くて失礼しますけれども『希望の回想』という彼のメモアールを読んでみたのです。そうすると十数ページも読まないうちに、ああこれ、エリツインが書いてもこんな事を書くだろうなと思うくだけりが出て来たのです。つまり、自分は国民の主権というものが政党によって細切れに代表されるという事は信じないと。国民主権というものは、国民に直接選ばれる大統領によって総体として、一体として代表されるべきものであると、こういう事をドゴールが書いている。エリツインの信念もその通りなんです。だから彼は、議会との関係では、要するに、議会は黙っているという訳です。自分の都合の良い議会をつくるとか、つくらないとか、そんな面倒臭い事をする前に議会は黙っていると。黙っているとまではともかく、大筋のところでは大統領に協賛すればいいのだということ。直接国民に選ばれた大統領こそが、国家を代表出来る存在であるという信念です。

ところがロシアの旧憲法というのはソ連式に人民代議員大会というのが、全ての上立つのです。だから、憲法だって何だって、その憲法第百四条によれば、何時だって改正出来る。そういう力を人民代議員大会は持っていた。だから、大統領のやる事が具合が悪く思えば、大統領の権限をどんどん削っていく事も出来れば、大統領を弾劾する権利も持っていた訳です。このように人民代議員大会というのが、要するに国権の最高機関でした。ですから、かたや国民の直

接の信任を得た大統領こそが一番えらいという立場と、憲法の建前にたてば人民代議員大会が一番高いという立場がある。この二つの立場は相容れない。私は議会は、合法性 *Legality* を振り所どころにしているし、大統領は正統性 *Legitimacy* を振り所どころにしていると説明していました。この二つはそもそも違う価値観に立つものだから絶対相容れない。一九九三年の四月にどうしてエリツインが改めて国民投票によって大統領としての信任を問うたかと言えば、自分の *Legitimacy* をそれによってもう一度強くしようということでした。それによって議会の振り所とする *Legality* に対抗しようという事だったのです。だけど私は、これはいづれにしても相容れない立場だから何時かはエリツインが *Legality* を *Legitimacy* が押し潰そうとするにちがいない。それが何時かというのを見張っているのが我々の情勢分析の職務であると。そういう事を申していた訳です。果せるかな、一九九三年の九月二十一日に至ってエリツインは大統領令を出して議会の機能を停止してしまいました。そして議会を包囲しました。

日本大使館にも気の利くのがいまして、そういう事態になったら早速手を打った。議会側は、ホワイトハウスに立てこもった。ホワイトハウスというのは国会議事堂のことです。モスクワ川がこういうふうに流れていて、ホワイトハウスの対岸に丁度ウクライナ・ホテルという高い建物があるのです。その二十七階に部屋を借りました。そこからずっと防衛駐在官を主体に交代で見張っていた訳です。それで私は前線観察に日曜日の午後二時半に行きました。十月の三日でし

た。それが運が良かったのです。丁度絶好のタイミングで三時過ぎに向こうのクレムリンの方からウアーッとデモ隊がやって来ました。数千人、いや一万人近かったのです。その前を警察の車がゆっくり走って来るのです、三台か四台。これは警察がデモを規制しているのだと思うでしょう。ところが、双眼鏡で見たら赤旗が警察のトラックの窓から突き出ていました。それはソ連の赤旗で、要するに、デモ隊が至る所で警察の部隊を蹂躪しちやって車まで取ってしまったのでした。だから、堂々とやって来て、あつという間に議事堂の周囲の警備陣をも蹴散らして中へ入って行く。議事堂の隣りにあるコメコン・ビルという背の高いビル、そこにモスクワの市役所が入っていた。ルツコイ副大統領のアジ演説で、まず血祭りにあげろといわれたのが、このコメコン・ビルの市役所でした。それからオスタンキノのテレビをやれ、更にクレムリンを、ということだったので。それでデモ隊が、コメコンビルに乱入して行く。たちまち銃撃戦が始まりました。デモ隊は警察から奪ったトラックでコメコンビルのドアを潰す。その辺りは私は見ていたのです。

ところで、本当に大勢人が死んだのはオスタンキノのテレビの攻防戦です。これはNHKに相当する全国テレビ・ラジオ局です。ここで本当に水平射撃の大銃撃戦をやりまして、フランス人の報道関係者は四人怪我して一人死にました。アメリカ人も一人死んで何人も怪我をしました。日本人は要領がいいのですか、小さいからですか、誰も死ななかつたから良かった。もし、死ん

でいたら私も、今頃こんな所でちやらちやらとお話出来ないところでした。しかしそんな事で、エリツインという人は民衆の支持を基盤にしている。何か危機があると民衆の支持に戻るというスタイルです。そう考えると、彼のやり方が色々分かって来ます。議会だとか、そういう面倒臭い仕組みはほどほどにということですよ。最近四月二十八日に市民的平和と言ったのが、今は社会合意ということになりましたか。それはやはり同じ様にモラトリアムの考え方なのです。余計な事をお互い言うのは止そう。憲法が何だとか法律がどうかかっていうのじゃなくて、みんな仲良く、あんまり喧嘩しないでやろうやと言うことです。民衆がそれを望んでいるからというのです。そういう事ですね。彼のやり方は。折角それだけの苦勞をして、去年の十二月に国会の選挙をやった。

そこで、ジリノフスキーという人が出て来ました。ジリノフスキーさんはロシアの *great des-tiny* は南だということです。アフガニスタン、イラン、イラク、インドあたりだから、東の方の日本とは仲良くしよう。その代わり、ロシアの南進は妨げないでくれと、そういう話だった筈なのです。ところがいつの間にか、北方領土を返すのは反対、と言うようになっていきます。そういう人ですが、あれはテレビを使うのが物凄く上手でした。私もテレビの政見放送というのを見てみました。まずね、ジリノフスキーは面白くなさそうな顔して黙っているのです。だけど周りの方に、ちやらちやらと彼の事を褒める学者みたいな人をちやんと呼んでいました。彼の主張は一貫

してるのが偉いと。何が一貫しているかという点、ロシアの民衆の利益を守っている。そこでビデオをパッと映すと、青空商人が果物を売っている所が出る。「この柿の実はなんぼや。原価はキロ三百ルーブル位やろ、もともとは。それを何で三千ルーブルで売ってんねん。そりゃ分かる、南の方からトラックで持って来る。しかしトラックのリース料が幾らで、トラックの燃料費が幾らで、その間のコストがなんぼか、ちゃんとこの高値を正当化してみろ」と言うのです。そんな難しい事を青空商人は考えた事がない。だからお手上げです。それで青空商人の顔を見ると、やっぱり純粹なロシア人ではないのです。ちょっと色が黒くって変わった顔をしている。これは、アゼルバイジャン人か、ロシア人でもコーカサスなど南の方の人です。それで一般のロシア人の気持ちをおおる訳です。一般の人は市場経済についての考えが甘いからどうしても物価が上がるのは悪徳商人がいて、それつらが暴利を貪るからだという固定観念があるわけです。そういう心理に上手くアピールするのです。

私でもなかなかこれはやるなと思った位だから、これは大したものです。それに比べて改革派の方は、何をやっていたかという点、あのガイダールという副首相、首相を代行した、あの人が、選挙戦の最中にG7の大使を飯に招んでくれたのです。飯に招んでくれるのは有難いのですが、「あんだ、わしらと飯食ってるより、もうちょっとほかにする事があるんとちゃうか」と、まあ、そうは言いませんでしたが、そう思ったものだから、「あなたは一体、時間をどういう風に分け

ておられるのですか。政府の仕事と選挙戦と、どういふ風にですか」と訊ねたのです。そしたら、「大使ね、それは易しいよ」と言われました。「自分は首相代行として一週間に七日働いておった。」「今はそのうち五日を政府の仕事にして、あとの二日を選挙戦に当てている。」「とこういふお答でした。

天下分け目の選挙戦だというのに、そんなことなのです。まともに選挙戦はやっていないのです。だから私はジリノフスキー現象というのはね、一過性であってあまり心配することはないと、その頃から言い続けてきました。現実に最近の世論調査を見ても、最も影響力のある政治家というのが百人位選ばれる中で、どんどん下っています。今は十七番目位に下っています。だからまあ、そう心配する事はないという感じがします。ただ、その選挙の結果、いろんな事がありました。ルツコイとかハズブラートフだとか此の前の暴動の首謀者が釈放された。しかし、大きな流れから言えば、むしろエリツインとしても、こういう市民間の平和という事を望んでいる訳で、社会的合意という事でやろうということですから、あまりあの時に派手に遣り合つた記憶をいつまでも持っていない方が彼の利益にも適うところもあるわけです。

私は昨年十二月の選挙の結果が *disastrous* だとは思っていないのです。まあ、収拾可能な範囲の政治情勢じゃないかと思っています。それにもう一つの結果は、ロシアの政治が、だんだん分かり易くなつてきています。つまりソ連式の政治というのは何であつたか。ロシア、ソ連の

伝統的な論理というのは誰か物凄く偉い人がいるのです。絶対的な存在、それがツァーであり、共産党第一書記であった訳です。その権力の中心との距離をいかに縮めるかというのが政治の争いであったわけです。だから互いに足を引っ張る。だが、最近の政治ではむしろそういう中央の権威は大分落ちてきています。むしろ多角化して来ている。チエルノムイルディン首相は何でやっているかと云えば、これは石油ガス資本の利益を代表している。世論調査でも、最近上に上ってきたルシコフというモスクワの市長は何をしているか。これは商業資本を代表している。それから、ガイダールとかフョードロフという人達は、銀行資本を代表している。単純化すればそういう図式も画ける。まあ、そういう連中の間の一種のインタープレーといえますか、お互いの間の勢力争いの中で政治が動く。この方がまだ分かり易い。

日本の政治だってそういうお前は一体何だということをもうちよつと明らかにしてはどうでしょう。みんなが国民の為じゃなくて、俺は三高同窓会の為だということならそれでもいいのじゃないでしょうか。そういう方が分かり易い。僕はサンデープロジェクトといって、あの田原総一郎という人のやっているのに出たのです。エリツイン訪日の前でした。「血塗られた手で陸下に握手させるのか」などといって、自由民主党の中でもエリツイン訪日に反対の人がいたのです。

そういう雰囲気の中で、私は、エリツインを迎えるためにモスクワから帰って来て総理官邸に報告に行ったら細川総理が、「あなた、そんな事言うなら自分でテレビに出てやりなさい。」と言

われるから、サンデープロジェクトに出たのです。したら、びっくりしました。「エリツイン独裁、わが闘争」とか「全てはエリツインの陰謀だ」とか字幕がバアアと躍ってね、大体田原総一郎がそういうふうに決めて、その筋書き通りにいくわけ。だから私が何か言ったら、「そんなことを議論しているのじゃない」って言って怖い顔で怒鳴ったのです。ところが、田原って人は大体どういう立場にいるのか、よく判らない。ただ、島田紳介という漫才師がいるでしょう、あれが司会席にいましたから、僕は「あの、紳介さん、今日の論点は何ですか」と訊ねたのです。したら、今回の騒ぎの全ての事の起りはエリツインの陰謀だったのじゃないかということを議論しているのです」という答でした。「それなら私はエリツインの陰謀じゃないという事を主張しているのだから、まさにその論点に沿っているのじゃないか」と私は申しました。紳介は偉いですよ。公正でした。田原さんは、そこで、急いで「中村さんを出せ。」というのです。中村さんは上智大学の講師とかで、会ったこともない人ですが、モスクワにいて学者だと称して何でも田原さんの都合の良い事を云う役のようでした。

まあ、日本のマス・メディアっていうのは流行を追いますな。最近になると、流行っているのはロシアの大国主義、帝国主義の復活でしょう。僕はちょっとこれも無責任だと思っただけです。ロシアは、そもそも大国なのです。大国が大国としての自分の利益を主張するというのは当り前のことだと私は思う。アメリカがグラナダやパナマで何をやりました。ロシアはやはり旧ソ連邦

の安全には関心がある。一体じゃあ誰がタジキスタンの平和と安定を維持するのですか。アメリカ兵は出ないでしょ、絶対。あんな辺境でアフガニスタンのゲリラと戦うことはないでしょう。それではロシアがやる以外に仕様が無いじゃないですか。私はタジキスタンについては、ロシア兵が一万二千位いるのはいい事だと思っている。バルト諸国からはちゃんと引き揚げると約束しています。ただ、ロシアがモルドバのドニエステル川の西側にいるのは、ちょっと胡散臭いと思う人もあるでしょうが。此の間も私、四月十二日のNHKの番組を見ていたけれど、あれは無茶苦茶ですね。ジリノフスキーがこう言いました。エリツインもこう言いました。同じだから二人は、同じ穴の貉で大国主義だと。私だって時々誰かさんと同じ事を言うことはあるでしょう。だけど、常に同じ穴の貉と決めつけられたら、ちょっと困る事もあるかもしれない。そんなもんじゃないですよ。世の中は、そんな単純な論理で決めつけられてはかなわない。もっともマス・メディアっていうのは本当は、私は偉いと思っています。

本当に、わずかな間に素晴らしい記事にまとめてしまう。我々が電報を書く時は慎重に書きまされど報道関係の人は、早くて上手ですね。本当にいい仕事をモスクワ駐在の記者諸君はなさったと思います。しかし、テレビなどで、全てにセンシショナルに事実の報道と主観とが入り混ったりすると、ちょっと納得しないところもありますね。だけど目立ってあんまりマス・メディアの悪口を言うと、ろくな事はありません。必ずしっぺ返しが来る。まあ時の総理だって何だっ

て呼び捨てにするぐらいだから、随分お偉いのに違いありません。私もこの三月の末に退官前の最後の仕事でパリでロシア外交に関するシンポジウムに行つて話をしてきましたけど、ジュッペというフランスの外務大臣が来て話をしました。非常にいい演説でしたけども、彼もやっぱり十二月の選挙の結果をはじめこの数カ月間にロシアで起こつてゐる事は心配だと云いました。心配だからフランスは何をするかと。それはフランスはロシアとの対話を益々強めるといふのです。一層対話を盛んにして困つた事は困つた事だと言ひ良い事は良い事だと言ふ。こういう事でした。

私は、日本のとるべき態度といふのはまさにそうだと思います。お話を終る前に日露二国間関係について一言、二言云つておきますと、領土問題は、もはやいつまで経つても解決しない問題じゃないと思う。エリツインが一度訪日を延期して、私も大使で相当不愉快な思ひましたけれども、一年後にちゃんと来ました。来たところでの結論として大変重要なことは、東京宣言といふその時の共同声明で、三つのことが決まっています。領土問題を解決するにあつては、三つのことを拠り所にしようということが謳われています。その第一は何かといふと、過去に日ソ間に適用されていたものを含めて、日露間に有効なすべての国際約束を守るといふことであります。この中に、いわゆる一九五六年の日ソ共同宣言が含まれるといふことは、エリツイン自身が記者会見でも認めたところであります。もう一つは、全ての歴史的、法的事実を尊重するといふ、これが第二点であります。それでしかも重要なことは、同じ東京宣言の中に「領土問題に関

する共同資料集」への言及があることです。一九九二年のエリツインの延期された訪日の準備のために日露外務省が一緒に作業して、領土問題に関する共同資料集を作ったのです。これは非常にいい資料集で、だいたい日本の主張はそこに盛り込まれています。その中にちゃんと一八五五年の日露修好条約も入っていて、これは下田条約でありますけれども、それによって択捉、国後とウルップ島との間の国境は自然の国境として二国間で合意されたものだと。これは資料集の序文の中でもその趣旨が謳われておる訳であります。つまり、歴史的法的事実と、ただ云い放しているのではなくて、一体何が考慮されるべき歴史的法的事実かということが、同じ共同宣言の中で言及されている共同資料集を見れば分るという仕組みになっているのです。

それから、第三のポイントというのは、法と正義の原則に基くと、こういうことであります。このとおり、まことに間然とするところのない立派な合意が出来ているのであります。ですから私はそれはそれでいいと思います。それもあたたかく理解することでもいい。私はこの四月十日に放映されました第十二チャンネルの斉藤栄三郎さんの「テレビ訪問」というのに出演しました。皆さんも気を付けた方がいいですが、ああいうふうにご家で録画をやるのは、大変です。事前の打ち合わせとかいって電気がどうか調べます。西田珠美さんとかいって何も言わない人だけどちよつと綺麗な人が来て、それがお化粧する部屋は何処だとか、斉藤栄三郎先生も洋服をお着替えになります。その部屋をどこにするとか。それで大きな電源車がやって来て、まあえらい騒ぎ

でした。だから僕は、こんなことをするなら、私がスタジオに行った方がよっぽど早いと言いました。そうしたら、いやー、それじゃあ視聴者の覗き趣味を満足させないからダメだって。まあ以上は余談でありますけども、この覗き趣味を満足させながらの番組で私が言ったことは、領土問題についてはすでに立派な枠組みが出来ているのだということでした。したがって、日本は自分の主張の正しさを信じて、今後は、「大きな自信と多少のゆとり」をもって対応することではないか、ということでした。

これは領土問題についてですけども、ロシアとの関係全般についてもそうだと思います。どうしても、日本人は、灰色のことに對しては居心地が悪いのです。白か黒か早く決めてくれという訳だ。しかし、国際関係というのは所詮灰色なものなのです。その灰色のものとどうやって我慢してつき合っていくかということをやろうと修業するのが外交みたいなものです。

ところが、十二月の選挙のあとと大國主義ということが云われ出すと、とたんにロシア支援にしても色んな疑念が出てくるようなことです。アメリカやヨーロッパは別です。先にジュッペの話もしました、アメリカの状況もそうです。欧米にはもともととは、一種のロマンティズムがあつて、ロシア、ロシアと言っていたので、それからの揺り戻しで今は少し冷めているということでしょう。しかし、日本がそうじゃないのです。あれだけの期間、不信、不信、不信で来たのを、やっとエリツインの訪日ということで取り戻して、折角一つの立派な枠組を作つてこれからやっ

ていこうっていう時なのです。日本は、ここで欧米の真似をする必要はない。ロシアの将来を冒頭に申し上げたジョージ・ケナンの如く大いに温かく見守ってあげばいい。これは私は信念をもてば出来ることだと思えます。民主主義ほど優れた社会制度はない。市場経済ほど有効に機能する経済システムはない。これがジョージ・ケナンの信念なんです。だからいつかはそこに収斂するにちがいない。不自然なものは必ず壊れる。それなら何も余計な手出しする必要はないじゃないか。それが、ケナンの信念でした。日本の場合はどうか。日本は、今はきらりと光る小国か普通の大国か知らないけれども、ロシアの民主化市場経済化を助ける能力は持っているのだから、助けてやって、良い国造りに協力していけばよい。そうすれば領土問題だって自ずから落ち着く所に落ち着く。本当に自らの主張の正しさに自信があるのなら、その信念に揺るぎがないのであれば、ギヤール、ギヤール、ギヤール、ギヤールスピーカーで騒ぎ立てる必要はない。むしろロシアが、そういう正しいことを理解し、正しいことを実行できるような国になることを助けてやればよい。

そこで、やっぱり、アメリカ人はいいことを言いますね。engageするのだと。engage、これはもともとは戦争の用語かと思えますけれど、要するに双方の軍隊が対峙している時に敵が何処行っちゃったか分らなくなると困る。しかし総攻撃するにはまだ時期が熟さない。敵が攻めて来るかもしたらん。だからengageして敵の動向を探りながら次ぎの展開に備えて行く。まさにジュッペが言ったように、ダイアログを絶やさないことです。そして基本的には温かい気持ちを持つ

て、現在は困難な状況にある隣りの大国の安定を繁栄に寄与して行く。領土問題については、自らの主張の正しさに自信をもって、そういう正しいことが実行できるような状況を早く齎らすように努力する。私は、そういうことを思いながらモスクワで四年間やってきて、帰って来てもう思っています。幸い小さいことで何か云われたことはありますが、大体においてはご苦勞、ご苦勞って言ってくれますし、お前の言ってること、して来たことは間違っていたという批判をまだいただいたこともありません。そんなことで今日も勝手なことを言わせて頂きました。諸先輩、どうもありがとうございます。

(後記) 私は、此の四月号から「外交フォーラム」という外務省の監修で出版されている雑誌にモスクワで大使をしていたときの回想録を連載しております。「帝国解体前後」という題で、来年末頃までは書き続けることになろうかと存じます。この「外交フォーラム」という雑誌は編集長に元「中央公論」編集長の粕谷一希氏を迎え、内容も充実し、この種のものとしては読みやすいとの評判であります。つきましては、この機会に同誌を試みに一年間だけでも講読するよう、お勤め先なり御縁のところにおすすめいただけませんか。「外交フォーラム」の出版元は、都市出版(株)で、電話は、〇三―三三二二―七五四一です。講読料は年間数千円くらいははずです。